

坪内稔典『正岡子規 言葉と生きる』を読む

——言葉に留まるといふこと——

青木亮人

実作者の方からお話を伺っていた時のことである。その方は近代俳句に関する数多くの卓見を仰った後、「とはいへ、私にとつて近代俳句は中村草田男ただ一人であり、数十年間そののみを想いながら句作を続けてきた」と吐露したことがあった。これに類するお話は他の方々からもお聞きしたが、ここでは割愛しよう。

実作者と接して実感するのは、ある俳人に強く魂を揺さぶられた結果——俳句のみならず評論や随筆、人柄も含めて——、自らもそのように作品を著したいと願いつつ俳句史を振りかえる方が多いという点である。そのため、彼らにおける近現代俳句史は強く影響を受けた俳人を中心とした史観になるか、その俳人の足跡と同意になることが少なくない。

研究者としては、資料を渉猟して当時の状況や文脈等の復元を目指しつつ、俳句史全体の消長や意義等を大局的かつ微細に（そして実証的に）把握した上で対象に迫りたいという願望が強いが、実作者は——あるいは評論家も——強烈に惹かれた作品から放た

れた電光をいかに受けとめるか、つまり現在の自身が何を感じ、何をつかみとったかを重視し、それを前面に押し出す傾向にある。

啓示を受けたように、圧倒的な存在に出会ってしまった実作者や評論家たち。あまりに強烈な体験であったため、それを軸に生きることを自らの道と信じ、数十年歩んできた者にとつて、その存在を語ることは研究者のように冷静を装うわけにいかない。一夜限りの奇蹟を述懐するように、昂ぶりを秘めた口ぶりでその体験を語るであろう。

正岡子規について長年に渡り発言し続けた坪内稔典氏は、多彩な表情を持つ執筆家である。研究者や評論家にして軽快な随筆家、俳人にして歌人……最近刊行された『正岡子規 言葉と生きる』（岩波新書、二〇一〇）以下、『言葉と生きる』と表記）にも多様な眼差しはうかがえるが、何より感じるのは子規という存在に出会ってしまった氏の、取りかえのきかない体験のありようで

はないか。

『言葉と生きる』は氏がこれまで述べてきた子規論の要諦をまとめた一書であり、また子規への愛着が随所に感じられる文章で綴られている。それは冒頭の一文中に示されているように。

当時、私は女子高校の国語科教員だったが、自分がほんとうにしたい仕事が分からず、いわばふらふらしていた。(略)そんなある日、珍しくパチンコで勝った。意気揚々と引き揚げていた途中、古書店の店先に積んであった『子規全集』が目についた。私はその全集を衝動買いした。(略)読み始めると面白かった。私は夢中になり、子規論を同人誌に連載した。そして数年後、私の最初の子規論『正岡子規―俳句の成立』(昭和五十一年)を出した。以来、子規を考えることが私の暮らしの基調になった。(はじめに)

この逸話は、氏の著作で幾度となく語られたものである。これが再掲されたのは感慨深い昔話というのみでなく、子規に魅せられ、彼とともに人生を歩む中で培った子規像を語るという宣言であり、従って『言葉と生きる』は評伝という形を取りつつ、「年月を追って彼の活動などを記したのではない」(はじめに)；すなわち、文学研究のように詳細な年譜に沿った確認や資料読解とともに新解釈等を提示するのでなく、氏の信念に沿った子規像

を描くのが『言葉と生きる』の骨子に他なるまい。その際、氏が採ったのは子規の人生に寄りそいつつ「言葉」に注目することであつた。「言葉」とは次のようなものである。

一声は月がないたかほととぎす

『子規子』の冒頭に置かれている短歌と俳句である。(略)「一声は月がないたか」すなわち肺結核という不治の病は、自分の未来である月から届いたのかもしれない、と子規は感じていた。だから、その病気を引き受け、わざと「子規」と名乗った。その子規は、今、余命十年を自覚しながら月を仰いでいる。言葉という權を手にして、彼は月への航海に出ようとしていく。そういう気がする。(五三頁)

「結核という不治の病」に冒され、「余命十年を自覚しながら」人生を改めて歩み出した時、彼が手に携えたのは「言葉」という權だつたという。坪内氏によると、子規は幼少期から「言葉」に救われた生涯だつた。「子規は弱虫であつた。(略)その弱虫の子規が回覧雑誌を始めたころからにわかに活発になる。言葉による表現活動が仲間を集めるのだ。そしてその活動の中心に子規がいる」(十六、十七頁)。この他にも彼は漢詩や膨大な本の筆写などを通して生きる愉しみを獲得したという(第一章「筆写を始める」「漢詩少年」など)。少年時代の後、青年子規は「言葉」で外界を「写生」することで再び救われるが、その経緯を坪内氏は次

のようにまとめている。

子規は明治二十五年に帝國大学を中退して日本新聞入社後、編集長として『小日本』を任されるも一年で廃刊（明治二十七）、加えて日清戦争が勃発したため新聞は戦争報道一色になり、「時勢から取り残されている」（九五頁）状態であった。内心穏やかでない子規は郊外散歩へ出かけ、その風景を俳句として「写生」した。すると「子規の気分は郊外の草や虫、そしてさりげない風景によって安らいだ」（九七頁）という。坪内氏独特の「写生」の機微がうかがえる箇所であるが、ここで『言葉と生きる』の原型となった『正岡子規―創造の共同性』（リプロボート、一九九一。後に『坪内稔典コレクション2 正岡子規とその時代』（沖積舎、二〇一〇）に収録）の一節を見てみよう。

草花という一見してささやかなものを楽しむことは、その根底のところで、俳句や短歌という小さな詩の根柢と通じているのかもしれない。（略）単純化して言えば、子規はそれらを（簡単なる思想）（俳諧大要「明治二十八年」）の詩と考えていた。（略）俳句や短歌は写生によって作られたが、その写生に彼は、思想や観念という過剰な思い―深遠とか神秘など―を持ちこまなかった。（実際の有のまゝ、を写す）という単純さを、その単純なままに実行した。（『坪内稔典』コレクション所収版、一一一―一二二頁）

坪内稔典『正岡子規 言葉と生きる』を読む

子規の「写生」は「思想や観念という過剰な思い」を排除し、「単純さを、その単純なままに実行した」ところに本領があったという。彼は自他共に認める野心家であったが、帝大を中退した上に日本新聞入社後は戦争報道で華々しい活躍もできず、屈託と煩悶が増すばかりであった。しかし、それらを盛りこみような「簡単なる思想」＝俳句を詠むことがかえって自らを救う契機たりえたというのである。

加えて、坪内氏は「簡単なる思想」＝俳句を通じて平凡な草花を詠んだ点に子規の新しさがあつたと述べる。

日常的に花に親しむことは、近代の新しい習慣である。もつとも、万葉の歌人たちは梅花を風流の対象としたし、桜、うの花、藤などは和歌でくり返し歌われてきた。江戸時代には椿や牡丹の観賞が大流行したこともある。しかし、それらは、農業という生産とは一応切れた人たちの、風雅の対象だった。だから、愛されたのはいつも、選ばれた特別の花であった。つまり、子規においては、特別の草花から日常の草花へ、という転換が行われているのである。（同右書、一二二―一二三頁）

氏によると、子規は和歌や江戸時代以来愛された「特別の草花」でなく、「日常の草花」を好んだところに特徴があり、「そのような素地の上で、写生が実践されたとき、（花は我が世にして

草花は我が命なり」という子規の感受性の核が見出された」（同右書、一二四頁）。

通常、子規の「写生」は俳句革新の文脈で語られることが多い。たとえば、子規は江戸期以来停滞した「月並」俳諧（類型的で常識を出ない表現）を打破するため洋画を参照しつつ、現実のありのままを詠むことで新鮮な表現・内容を獲得しようとした、という風に。無論、これは江戸俳諧／近代俳句の分水嶺として重要な問題であるが、坪内氏の視点が際立つのは、小説（novel）が新時代の御旗と目された明治期に子規があえて俳句を選び、かつ「日常の草花」を「写生」しようとした意味を、その心中の柔らかな鬘をなぞるように探った点にあった。すなわち、人並み外れた野心家が味わったたび重なる挫折や屈託を、つまり自意識の「過剰な思い」をそのまま小説に著すのでなく―試みはしたが、作品は生彩を欠いていた―、「小さな詩」で「日常の草花」を詠むことで「過剰な思い」から離れ、それを冷静に受けとめる余裕を確保するのが「写生」であり、子規はそれを俳句「小さな詩」を通じて発見したことを氏は指摘したのである。

坪内氏の「写生」観は、古くは保田与重郎などが描いた子規観に通じるであろう（「写生は所詮病床の最も美しい眼の変形であった。恐らく子規にあらはれた感傷の相である」（保田「正岡子規について」、昭和十一））。坪内氏は「感傷の相」をより細かく見定めることで、子規が「俳句・草花・写生」小さな詩・単純さ」によって救われた側面があることを強調したのである（この

子規観は坪内氏の心情が濃く反映しており、氏自身を語る箇所としても興味深い（ここでは触れない）。

『言葉と生きる』に戻ると、坪内氏はそれまでの「写生」観を「言葉」と言い直し、子規の活動全体を覆う原理として示している。たとえば、子規は結核に冒されて病臥を余儀なくされた後、陰惨な病床の日々や自身の墓碑銘、死後の土葬などを「言葉」で書き続けたが、それは「絶望的な状況を描きながら、子規は書くことでその状況を離れている。（略）自分の客観化が生じ、よい気分になるのだ。（略）この墓碑銘を書きながら、書く楽しさを遊んでいる」（一四九―一五〇頁）ためであった。坪内氏が子規に深く共感し、また憧れるのは、彼の「言葉」に対する姿勢であろう。「子規の文章、そして俳句や短歌が好きだが、今もつとも好きなのは、子規の文章観の根っこにある鬱さ晴らしという考えである。自己を権威化せず（固定せず）、自己を他者へたえず開く。そのような風通しのよい場所が、気晴らしという言葉の示す場所だったのではないか」（二七九頁）。暗く、湿った、厄介なものに囲まれた病床ゆえに子規はあらゆる感情を「言葉」で率直に「写生」し、「風通しのよい場所」を求めたのであり、坪内氏が子規に惹かれる一端もその強靱な臆面のなさであろう。

ただ、坪内氏はそれを正面から描くことはしない。死や宿命、あるいは挫折や劣等感とともに矜持や野心がないまぜになった精神に触れることを慎重に避け、あくまで子規の「言葉」に留まり、「根っこにある鬱さ晴らし」を軽快に示そうとしており、そ

ここに『言葉と生きる』の魅力があるといえる。

本書は子規の「言葉」を追う内容のため、明治文学の諸形式が多々登場する。回覧新聞、漢詩、和歌／短歌、俳句及び俳句論、新体詩、漱石との書簡、随筆……これらは文学研究がさほど進展しておらず―俳句や短歌ですら不明点が少なからず存在する―、『言葉と生きる』を読むことで子規並びに明治文学研究の余地が多いことに改めて気づかされるであろう。その窓口としても本書は興味深い。何より坪内氏が俳句や子規にこだわり続ける理由の一端がうかがえるとともに、文学者子規の本質をさりげなく示した一書とはいえないであろうか。

(岩波書店 二〇一〇年発行)

(あおき・まこと 同志社大学非常勤講師)